二〇二二年一一月二五日

寒星を映して潤む仔牛の瞳　ひのと
琴坂の流れに乗りし散紅葉　はく子
柿をもぐ翁巧みな竿さばき　澄子

二〇二二年一一月二四日

異国語の飛び交ふ古都の紅葉坂　ぽんこ
白き指上へ下へと祭笛　みきお
毎年よ柿を吊るせば雨の降る　やよい
雨晴れてまた軒へ出す吊るし柿　みきえ
バンクシーめく白壁の蔦紅葉　素秀

二〇二二年一一月二三日

葛湯吹くモーゼが海を割るやうに　素秀
しぐるるや植えし小苗の起ち直り　千鶴
白菜を包む新聞継ぎ足して　ひのと
自家製の干柿美味とティータイム　こすもす
眠る子に指握られてゐる小春　ひのと
柊の香に足とむる夜の道　あひる
雨粒の真珠をこぼす実南天　満天
朝風呂の至福勤労感謝の日　はく子

二〇二二年一一月二二日

落葉掻く墓守に降る鳥語かな　もとこ
小雪や父の忌終へて部屋広し　なつき
五線譜のごとくに並ぶ吊るし柿　きよえ
良き事も過ぎて痩せたる古暦　素秀
せせらぎの水音の果てて冬に入る　澄子
バイオリン抱く少女や黄落期　豊実
冴ゆる沖星に紛るる船明かり　ひのと

二〇二二年一一月二一日

柿吊るし終へて華やぐ軒端かな　みきえ
去りがたく焚火の主と二人きり　素秀
目瞑りて落葉しぐれを浴びにけり　たか子
木枯らしが湯気攫ひゆく露天風呂　かえる
伝言メモ卓上にありおでん鍋　宏虎
掘つ建ての牡蠣小屋見ゆる旅籠　智恵子

二〇二二年一一月二〇日

朴落葉人の気配のごとありぬ　む べ
落葉蹴り上げて下校の子ら駈くる　満天
浦小春指呼に満珠と干珠島　せいじ
母の声懸大根の向ふより　ひのと
老い母の回顧話を聞く炬燵　あひる

二〇二二年一一月一九日

灯油汲み終へて仰ぐや寒北斗　ひのと
錦秋の外湯巡りの下駄の音　智恵子
山霊を鎮めて深き紅葉谷　たか子
子と将棋手加減なしや木の葉髪　なつき
タンカーの過ぎる海峡冬暮色　せいじ
裏側も覗いてみたり菊人形　あひる

毎日句会みのる選・二〇二二年一一月二七日